

## 中国の大河上流域における生態移民

小林 善文

Ecological Migration in China's Upriver Areas

Yoshifumi KOBAYASHI

## はじめに

「アジアの水源」「中華水塔」と称せられる青藏高原は、中国の<sup>チベット</sup>西藏自治区と青海省を中心とした地域で、黄河や長江という中国国内を流れる大河や瀾滄江・怒江といった東南アジアに流れていく大河の源流域となっている。この地域はまた長江上流域から黄河源流域へと送水する南水北調西線工程計画の対象地域ともなっている。筆者は、南水北調西線工程の検証を通して、その矛盾と課題を指摘し、<sup>1)</sup>黄河上流域の瑪曲県を中心とした甘南の生態環境を保全することの方が諸々の矛盾を生まず、コスト面でもはるかに有効であることを指摘した。<sup>2)</sup>

黄河・長江といった大河の上流域の生態環境の保全は、水資源の確保にもつながる。破壊が進んでいる生態環境の保全と維持には、上流域の住民の生産活動を規制し、自然環境との共存を図る必要がある。そのための有効な手段として推進されるようになったのが生態移民である。中国の中央政府と地方政府は、退耕還林環草政策などと並んで生態移民政策に取り組んできた。この政策の実態と課題、さらに今後の展望を考察することは、中国の環境政策を評価する上で大きな意味をもつと思われる。この研究は、何よりも現地での調査が軸になるが、そのための機会をもてなかった筆者は、中国人研究者の調査結果に依拠しつつ考察を進めざるをえなかった。本稿では、対象地域として黄河上流域では瑪多県の三つの移民村、長江上流域では横断山区の移民村と長江の支流で四川省北部にある移民村を選んだ。またダム建設に伴う移民も広義の生態移民と考え、南水北調中線工程の丹江口ダム改修に伴う移民も比較検討の対象とした。

## 1、黄河上流域の生態移民

黄河の河源は青海省の青藏高原にあり、星宿海から扎陵湖、鄂陵湖に流れ込む。この地域は果洛州瑪多県で平均海拔が4300mあり、三江源自然保護区の中心地域でもある。この地域から遷った移民の状況について、2014～2015年に三度の現地調査をおこなった馮雪紅の報告により、性格の異なった三つの移民村の特色を分析する。<sup>3)</sup>

「黄河源頭第一県」と称せられる瑪多県は、青海省で海拔が最も高い県である。瑪多県など三江源流域での主要産業は牧畜で、草原の許容限度を超えた過剰放牧は、21世紀初頭段階で60%前後に達し、<sup>4)</sup> 草地の退化と砂漠化の傾向を強めている。2004年7月の実地調査では、瑪多県で1万人を超える牧民が、認可された草原に留まらず、遠隔地にまで遊牧して草原の退化を加速している。<sup>5)</sup> 20世紀からの人為的な生態環境破壊が進む状況に対して、2003年1月に国務院は三江源自然保護区を国家級自然保護区とすることを批准した。この計画によれば、自然保護区の総面積は15.23万km<sup>2</sup>で、放牧地を草原に戻す退牧還草が9,658.28万畝（1畝は6.67アール）、耕地を林や草原に戻す退耕還林還草が9.81万畝、山林での伐採を禁じて植林する封山育林面積、砂漠化防止対象面積、湿地保護と黒土灘治理の面積を合計1,200.89万畝にするという目標を2010年までに実現すると謳っていた。

計画実現のための生態移民は55,773人で、131,600人の飲水問題の解決も目標となっていた。<sup>6)</sup> しかし計画通りには進まず、草原の許容量を超える放牧がおこなわれ、結果として飼育できる牛・羊の頭数の減少、摂取可能な草の質と量の減少が目立ってきた。草原の維持は水資源の確保に繋がるので、工程開始とともに扎陵湖郷で全員転住が実施され、388戸1,800人が移民となって558万畝が禁牧区とされ、11万頭（羊に換算）の家畜が減らされた。<sup>7)</sup> この移民計画は以下の通りである。全体移住の場合、8万円を標準とする住宅の提供、各戸8,000元の飼料補助をする。一部の希望者が移住する場合には、住宅補助4万円、飼料補助6,000元を10年間限定でおこない、10年後に居住地と職種選定をする権利を与えることにする。<sup>8)</sup> これは他の生態移民と比べて極めて優遇された条件で、当局がこの移民の重要性を認識していたためと考えられる。

瑪查理村は瑪多県内での移住を希望する移民の移住先で、県の中心地から3km南という短距離移住となる。ただそこに移民の定住に適した土地が準備されているわけではない。また商品経済の世界に遷ることになるので「移動後たいへん多くのものを自ら購入しなければならず、外で働いて金を稼ぐのはこのため」<sup>9)</sup> (39歳男) とならざるをえない。瑪查理村では農業機械の操縦と修理、自動車運転技術、ハンダ付けの技能訓練などの機会を設け、高速道路の建設工事などに人員を派遣して就業と収入の問題解決をめざしている。<sup>10)</sup> ただし瑪查理村の1人平均の年間収入は3,480元で、そのうち国家と地方の政策に伴う収入が2,958元、その他の収入が522元となっていて、経済的自立という面では厳しい状況にある。<sup>11)</sup> 移住に伴ってトイレなど衛生環境は改善されたが、労働技能という面では放牧に関する専門的知識と技能には秀でていても、その他の科学知識や技能はほとんどもっていないのが現実である。<sup>12)</sup>

従来は肉類や乳製品の摂取は容易であったが、移動後はそれらを購入しなければならず、「羊肉は1斤（約500g）が30元以上、牛肉は最も安いもので1斤28元で困っている」（71歳男）。「酥油や米、麵類、野菜等の値段も高く、牛羊肉などは十分に食べられない」（64歳男）。<sup>13)</sup> こうした直接的な不満に加えて、服装や言語などの問題もある。「チベット服から漢民族の服装への転換は、仕事と生活の両面で必要である」（44歳男、26歳女）。<sup>14)</sup> 「チベット語から漢語使用への転換は、就職面でも欠かせない条件となっている」（22歳男）。<sup>15)</sup> 移住前には食料だけでなくほとんどの生活用品を自給でき、燃料も牛糞を主として使用できたが、移住後は食料、日用品、医療関係や教育などの出費が明らかに増

加し、移民の生活を圧迫することになった。<sup>16)</sup>

このことは以前の放牧生活への回帰願望をかき立てることになる。ささやかな収入の増加のために冬虫夏草などの薬草を探してもあまり採集できず、政府の補助がなければ生きていけないというのが貧しい移民の本音である。「再び遊牧生活に戻りたいが、高齢でやれない」(75歳男)とか「遊牧生活はよかったが、移住後は病気がちとなり、国家の補償がなければ、生活できない」(35歳男)という回答がある一方で、「移住後は子女の教育に都合がよく、医者にもかかりやすい」(42歳男、27歳女)という回答もある。<sup>17)</sup> 後者のように移住を積極的に受け止める意見があるが、遊牧生活への回帰願望は地方都市とはいえ、都市生活になじめない年配者の心情にも窺える。<sup>18)</sup> 馮雪紅らは、牧民の積極性が一般的に低く、自ら現状に適應しようとする積極性が失われていると評するが、<sup>19)</sup> 外的変化に翻弄され、政府援助に期限がある現状を考えれば、簡単に移民の姿勢を批判することはできないだろう。

果洛新村は、州を越えた長距離移住により建設された移住地である。瑪多県の黄河郷と黒河郷のチベット族189戸731人が、400km以上離れた同徳県に移住した。同徳県は、拙稿で湿地保護の重要性を説いた黄河の湾曲部にある瑪曲湿地より流れに沿って北方に下った地域にある。<sup>20)</sup> 果洛新村の地は、元々蘭州軍区が軍馬を飼育していた草原で巴灘草場とよばれ、部隊撤収後は政府管轄下におかれていた。<sup>21)</sup> 長距離を移住してこの地に遷ったチベット族移民は「国家が、あなたがここに10年住み、10年たったら帰ってよい」(45歳男)といったと受け止め、「草原には牛や羊がいないので、政府が多くの金を支給してくれることを希望する」(48歳男)と述べ、「この辺の生活はよく、国家の政策もよくて、支給される金が多い」(29歳女)と単純に考えているケースが多い。移住後は「燃料の牛糞はなく水不足で、水を購入するために1年に3,000元以上使った」(53歳女)という不満もある。

移住前に瑪多県では家畜飼育の戸別請負制を実施して、草原の賃貸や合作経営を進め、条件付きながら経営規模の拡大も奨励してきた。しかし、草原の許容限度を超えた牛や羊の飼育による生態環境破壊の現実に直面して、同徳県への移民政策を推進することになったのである。ただ移民にとっては「牧場は国家が既に回収し、牧場の補償費は、黄河郷で1人1年に8,880元、黒河郷で1人1年に9,006元である。当時移住しないといっていた人は、牧場の補償費が1人1年に7,000元余りで、移住した人の補償額と差がない。……以前は牛と羊は自分のものだったが、現在は牛と羊や牧場もない。移住しなかった人は牧場を自らもっている」(59歳男)と不満を述べている。また「草原は私たち自身のものであるが、国家は森林草原を保護する必要があり、一家を挙げて同徳に遷れば、牧場はあなた方自身のものだといっている」(41歳女)というが、現実には移住に際して生活の糧となる家畜を売るか、貸すか、親戚に飼育を頼むことになり、牧民にとって損失となっている。<sup>22)</sup>

果洛新村への移民の元の居住地であった黄河郷が海拔4286～4870<sup>1)</sup>、黒河郷が海拔4250～5267<sup>2)</sup>であるのに対して、果洛新村は海拔が3200～3500<sup>3)</sup>で気候が暖かく、移民で高血圧などの病気に悩んでいた人々にとっては好都合であった。<sup>23)</sup> 移住に伴い遊牧から「非牧」へと転換し、男性は衣服製造を中心とした業務に就く者が多かったが、女性は家事労働で、収入源のない者が多かった。加えて遊牧生活時には容易に摂取できた肉や乳製品が、移住地では高価で口にすることができないという声が多い。<sup>24)</sup> また移住先では、政府統一規格の家屋に住んで便利になったが、新たな人間関係の構築に

苦勞することになる。先住の漢族との間の対立と喧嘩も日常的で、先住の商人は漢族なら20元前後で売る品物をチベット族なら騙して30～40円で売りつけるケースもある。<sup>25)</sup> 移民は「牧民ではなく、農民でもなく、都市民でもなく、労働者や幹部でもなく、社会の辺縁の地におかれている」という「四不像（四つの不都合）」な状況におかれているのである。<sup>26)</sup> そのため「故郷は瑪多で、10年間の契約を結んだだけであって、10年たったら瑪多に帰るのだ」（47歳男）、「放牧しなくても牧民で、10年たてば、帰って放牧だ」（73歳男）という意識をもち続けることになる。<sup>27)</sup>

もちろんすべての移民が瑪多に戻ることを希望しているわけではないが、移住地の生活環境に慣れず、生活が苦しく、補助金打ち切りとなると耐えられないことが、瑪多の記憶を美しくしているのであろう。ただ移住先は学校教育を受けるのに有利で、漢語を学び大学に行けば、仕事を探せる希望が生まれる。「現在は教育を重視しており、学校はどんなことでも教えてくれるが、寺院はチベット語を教えてくれるだけである」（66歳男）という現状があるからである。<sup>28)</sup> ただし「大学に行かせるには多額の学費を調達しなければならず、最大の心配事になっている」（48歳男）。<sup>29)</sup> 日常生活でも「70%の人は漢語を聞き取れるが、しゃべれない」（47歳男）とあって、居住環境への適応にも苦勞している。

生態移民が移住先で生産と生活を維持し発展できることは、移民政策の成否の鍵となっている。青海省沢庫県和日生態移民新村は、移民による石刻業を特色とする村として出発した。和日村では数人の村幹部と出稼ぎに行っている村民が漢語を話し、大学生も漢語を用いて交流することができるだけで、残りの村民はチベット語しか話せない。<sup>30)</sup> それだけに高い技術をもって優れた石刻作品を制作、販売して生き残りを図らざるをえない。2005年に始まったこの生態移民に対する補助金は、15歳以下と55歳以上では、毎年1人当たり2009年に2,300元、2010年に2,600元、2012年に3,800元、2014年に5,400元と増加を続けた。こうした生態移民補助金の増額に加えて移民の最低生活保障補助が、副業収入として重要な意味をもっていた。<sup>31)</sup> しかし、補助金には期限があるので、主要産業である石刻を民族文化産業として「高原石刻第一村」の美称にふさわしい水準に育て、生活を支える主要な手段にしていかなければならない。2014年に和日村の1人平均の年間収入は4,502.8元となって、沢庫県のような貧困県のなかではやや高い収入となっている。<sup>32)</sup> とはいえ石刻作品が売れなければ、商品経済に巻き込まれている移民の生活は苦しくなる一方である。何より石刻の専門技術の向上と生産方式の改善が欠かせないが、加えて環境資源や文化の保護との関連性を重視しなければならないとしているのは、<sup>33)</sup> チベット族の移民村であることを意識しての主張だろう。

## 2、長江上流域の横断山区の生態移民

横断山区は四川省、雲南省、西蔵自治区の交界地域にあって、南北1,400km、東西600km、平均海拔3000～4000mである。この地域は少数民族の居住地域で、17～18の民族が生活している。この横断山区にある涼山彝族自治州で、金沙江と雅砻江の間にある塩源県の生態移民の現状と抱える問題について取り上げる。この地域の生態移民は、1986年から1992年にかけての初期移民、1993年から2000年にかけての貧困解消をめざす扶貧開発の試験的移民、2001年から2005年にかけての本格的な扶貧開発の移民と三段階に分かれて実施されたが、<sup>34)</sup> これらの移民の現状と抱える問題を村ごとに考察する。

- (1) 塩源県白鳥鎮長坪子村→長坪子村の移民の居住地は海拔3000<sup>43</sup>以上で、耕地の傾斜は25度以上が多く、気候条件も悪かった。急傾斜地での農作物栽培の影響で大規模な水土流失と沙漠化が生じ、生物多様性も失われている。焼き畑などの伝統的な工作方法も生態環境の悪化を加速している。移住前の1戸平均の家畜数は羊30頭、牛4頭、馬3頭、豚6頭、鶏10羽で、放し飼いのため草地在り荒れてきた。<sup>35</sup> 山上の住民を移住させた後は、森林の回復を企図してきたが、初期段階の造林計画は、住居の分散と農牧民の生態保護観念の希薄さから植樹の活着率はさきわめて低かった。移住先の長坪子村も問題が多い。水不足はその代表的なもので、1戸当たり1年に200元以上を投じて水を買っている。林木の伐採は禁じられているので、燃料となる薪を他から購入しているが、1戸当たり1年で約500元となる。<sup>36</sup> 服装は漢族のものを着用し、家畜が大幅に減少したので、肉を食う機会が減少した。家畜の減少は、それを捧げる宗教活動にも影響する。海拔2500<sup>44</sup>前後の長坪子村に移住してきて、風蝕と水土流失の問題は解決されず、土地の開発は土壤破壊に繋がっている。<sup>37</sup> 移民の一人は「この地に遷って隣人と近いことを喜び、電気が来て交通が便利になったが、水がないことでさまざまな面での発展を阻んでいる」(39歳男)と述べている。<sup>38</sup>
- (2) 塩源県白鳥鎮宝清村→1970年代から海拔3000<sup>45</sup>前後の高さで急傾斜の生態脆弱区に住む彝族などが傾斜が緩やかなこの地に移住し始め、地方政府が1995年に宝清農場を設け、扶貧開発の試験区とした。2001年には四川禾嘉集団股份有限公司がこの農場を購入し、1億元以上を投じて果物・野菜を加工する工場を建設して、300人を雇用了。<sup>39</sup> 宝清村の農家は216戸、1,260人で、上述の1970年代からの移民の他に、扶貧計画の移民や自発的に移住した人々も含んでいる。この地域も水不足で悩んでいるために、会社の所有農場では滴灌を用いた節水農業によりリンゴの新しい品種などを栽培している。<sup>40</sup> 試験区であることから、農家の商品観念、教育や共同作業の重視、彝族と漢族の交流促進などの意識改革を進めている。<sup>41</sup> 宝清村には放牧地があることから、牛・羊の肉の値段が比較的安く、四川塩源禾嘉绿色食品有限公司と改名した働き口もあって収入源があり、家計は比較的安定していると考えられる。<sup>42</sup> ただ移民の増加により用水使用量が増加し、経済林の品種選択が制限され、古くからの住民の不満は高まっている。<sup>43</sup> 移民が遷った後の地は、退耕還林がおこなわれており、宝清村は移民政策が比較的成功的な地域といえるだろう。
- (3) 塩源県白鳥鎮三棵樹村→居住地は海拔2800<sup>46</sup>以上で、土壌は痩せ、水土流失、地滑り被害の発生もあり、25km離れたこの地に人々は2003年3月に移住した。<sup>44</sup> 移住によって食生活が豊かになり、電気が使え、家屋と衛生状態が改善され、道路がよくなり、学校が近く、安全で仕事をするのに便利になった、と長所を挙げる。ただし土地が狭くて豚や鶏を飼えなくなるなどの不便も訴えている。<sup>45</sup> 移住先の統一規格の家屋は建築費が1.4万元前後で、政府補助があるとはいえ6,000元は自己負担である。水不足で各戸が井戸を掘る(半額は政府補助)が、水が出ないケースもある。耕作地の使用権はそれぞれ購入しなければならず、各戸の経済力によって差が出るが、おしなべて狭い。トウモロコシの他は花椒など経済作物を栽培している。放牧地もあって牛や羊は専門家に管理を委ねているが、家禽は狭いところで飼育しているので病気にかかりやすい。小型のトラクターを所有する家もあるなど経済格差が見られる。<sup>46</sup> それでもこの調査を担当したグループは、

- 長坪子村に比べて人々の表情がよく、希望のもてる移民であると総括している。<sup>47)</sup>
- (4) 塩源県大河郷甲花村→2001年に成立した移民村で、土壌はトウモロコシや豆類の栽培に適している。海拔2400<sup>㍉</sup>前後のこの地に農家167戸、733人が移住し、すべて彝族である。それまでの居住地では雪氷被害が8年続き、政府主導で移住した。統一規格の家屋は建築費が12,000円で、そのうち7,000元は政府補助、残りの5,000元は信用合作社が低利で融資している。山上での放牧も可能で、薬草や松茸などの採集で500元前後の副収入がある。水資源は豊かではなく、政府が建設した雨水を集める用水池があるが、各戸1,000～2,000元の維持費を集めており、水がなくなると5～6 km離れた取水点から人が背負ったり馬に乗せたりして運搬する。<sup>48)</sup> 人口密集地であるためか2001年に麻疹、2004年には下痢性の伝染病が蔓延したが、食品衛生状態の欠陥が要因と考えられる。所有地の狭さも問題で、1人平均1.4畝で、その3分の1は季節によって水没する劣悪な条件下にある。経済的原因から3～4人の子どものうち1人しか学校にやれない。<sup>49)</sup> 個別の調査では、放牧も可能で、トウモロコシや麦類、豆類、野菜、桃、花椒など多くの品種を栽培しているが、化学肥料やマルチフィルムなどの購入費支出の他に水確保の困難さがある、各戸の格差も大きく、子ども全員を学校にやれない状況を生んでいると考えられる。
- (5) 塩源県金河郷小塩池上・中・下鋪子→金河郷は塩源県東南の雅碧江畔にあり、標高が低く、亜熱帯河谷気候に属している。この地域では水稻・トウモロコシ・小麦が主産品である。1990年末、二灘発電所の完成と官地発電所の建設準備に伴い、二つの発電所の間に道路を建設し、新たな小都市建設に着手した。その居住人口の増加を図るために、国家の政策として扶貧移民計画の実施に踏み切った。<sup>50)</sup> 移民は巴折郷（海拔2800<sup>㍉</sup>）、阿沙郷（海拔4500<sup>㍉</sup>）などの気象条件が劣悪で急傾斜地に住む僱族などであった。<sup>51)</sup> 移住後、生活水準は多少は改善したが、十分ではない。それは収入が少なく、肉を買うことができないことにも見られ、高地にいたときには自ら家畜を飼い処理できたが、移住後はできなくなり、農業でも知識が乏しくて生産量を増やすことができないためであった。<sup>52)</sup> 多くは漢族である先住民との摩擦があり、確保できる土地が狭く、牧場がないので家畜を増やすことができない。水不足も生産拡大の大きな壁になっている。貯水池の維持管理のための負担も大きい。種子・農薬・化学肥料の購入費用、食料購入費用、子どもの学費負担は大きい。とくに学費は借金でまかっているケースが多い。家屋の修理費用は大きく、林木の伐採はできないので燃料費も捻出しなければならない。<sup>53)</sup> 高地から降りてきて気温が上昇してきたので、数少ない豚や羊が病気にかかりやすくなった。遅れた衛生観念は、新たな家屋に移ってもほとんど変わらない。栽培技術を新たに学ぼうとする意欲に欠け、増産ができない。子どもたちの就学を重視する移民は多く、移住目的の優先課題としているが、学費が高い上に制服を購入しなければならない。家長のなかには「重男軽女」の思想をもち、女子に就学させないケースもある。<sup>54)</sup> 移民を受け入れてきた地域でも、連れてきた家畜が草を食べ尽くし、燃料とするために河辺の木々を伐採して環境破壊を加速しているという報告もある。<sup>55)</sup>
- (6) 塩源県金河郷野鴨塘村→海拔2600<sup>㍉</sup>以上で40度を超える傾斜地をもち、厳しい気象条件にある地域から、海拔1400<sup>㍉</sup>に設けられた地域に1999年に移住してきた僱族の移民村である。トウモ

ロコシや洋芋・雑糧を栽培し、牧畜を兼営していた移民が遷ってきたが、1人平均の土地は1畝に過ぎず、先住の漢族との関係は比較的好かったとはいえ、さまざまな問題が生じてきた。<sup>56)</sup> 移住してきたのは14戸で、暖かい土地に降りてきたため、家畜が病気に罹って収入が減った上に各種支出が増え、とくに教育面での優待政策の恩恵が受けられなかったため未就学児を生み、10戸が貧困状態に転落した。水不足は生産に影響し、わずかな収入を求めて70～80km離れた山に入って薬草を採集してささやかな収入を得ている。<sup>57)</sup> 当初の移民希望者は多かったが、自己資金3,000円を準備できず、一部しか遷れなかった。移住後は化学肥料を使わざるをえず、現金収入に繋がる家畜は少数しか飼育できない。収入は支出に遠く及ばず、借金を返すすべもないと聞き取りに応じた移民は語っている。<sup>58)</sup>

- (7) 塩源县金河郷温泉村河沙壩→移住前に条件が悪いとはいえ20～30畝の土地を有していた移民は、この地で1畝に満たぬ土地しか与えられず、水不足もあって食料自給もままならない状況に置かれている。トラクターでならした土地は石が多く、土壌改良に相当な年月が必要である。高所では牧畜ができたが、移住地は土地が狭くて放牧ができない上に家畜は気温が高くて病気に罹りやすく、獣医も真面目に治療してくれない。水不足で汚れた雨水を生活に使わざるをえない。<sup>59)</sup> 多額の借金を抱えた移民が多く、借金返済のメドが立たない。教育費や医療費の負担も大きい。最大の希望は水資源問題の解決である。<sup>60)</sup>
- (8) 塩源县干海郷柳樹湾村→この移民村は66戸、326人で、3戸の蔵族の他はすべて彝族である。居住地は海拔3000<sup>㊦</sup>以上であったが、海拔2300<sup>㊦</sup>の地形が平坦で肥沃な地に2001年1月より移住してきた。居住地では子どもが学校教育を受けられず、病気に罹っても医師の診察が受けられなかった。山を降りたのである。しかし、1人平均の耕地は1畝、果樹園は0.47畝と少なかった。<sup>61)</sup> この移民村では生産に必要な水源に乏しく、電気の供給も不安定で停電が多かった。家屋建設に国家の補助が1戸当たり7,000元あり、5,000元を借りることができるが、それだけでは不十分で、移民自身が少なくとも8,000元を負担する必要があった。<sup>62)</sup> 生活環境は移住前に比べて大幅に改善されたが、農業関係の種子・化学肥料・マルチフィルムなどの他に、油・塩・燃料費・電気料金・医療費や子女の教育費、衣料・家具の購入費、文化娯楽費など居住地ではあまり目立たなかった支出の費目が増え、各種作物の栽培や豚の飼育などで収入増を図っても赤字の基本構造に変化は生まれなかった。<sup>63)</sup>
- (9) 塩源县棉桎郷狐狸洞村→2000年に成立したこの移民村は海拔2400<sup>㊦</sup>の地点にあり、高地の山崩れなど自然災害の脅威にさらされている地域からの移民を受け入れた。移民は45戸で、すべて彝族である。<sup>64)</sup> この地域も水不足に悩み、緑化のための植樹も活着が難しい。国家の移民政策として進められたこの地への援助は、3年間の農業税減免、電気時計の無償供与に加えて、マルチフィルム・化学肥料・リン肥料・トウモロコシ種子の購入費として1戸当たり毎年1,000元の支給などであった。<sup>65)</sup> 移民は1人当たり2畝の耕地を割り当てられ、荒地などは購入してきたが、その価格は1畝当たり370元であった。そこでは牧畜と各種商品作物の栽培もおこなうことができた。交通が便利となり、病院に行くことができたが、補助金を受け取れる移民と先住の漢族との反目も

見られた。<sup>66)</sup> 水不足は農業の多角化を妨げ、生活面や衛生面での改善を阻んでいる。個別の調査では、学費に加えて商品経済下の支出の増加、肥料や各種農業用資材の購入費、生産用水の購入費などの負担の増加に苦しめられていることが判明する。<sup>67)</sup>

### 3、長江支流の生態移民とダム改修の移民

四川省を流れる長江には、上流の金沙江の他に大きな支流として雅碧江、岷江、嘉陵江がある。これらの河川の上流域に当たる甘孜藏族自治州や阿壩藏族自治州は、長江の水資源の確保にとって重要な地域の一つである。これらの地域は、黄龍や九寨溝などといった海外にも名を知られている景勝地をもち、観光開発が進められている地域でもある。

甘孜・阿壩両州の草原では家畜の放牧が盛んであるが、羊を単位とする頭数で比較すると20世紀後半から21世紀にかけて改革開放に伴う「承包」（請負）制度が採用されてから急速に増加した。実際に放牧などの方法で飼育されている家畜を羊に換算して示すと、甘孜州では1985年の1,172万7,700頭が2005年には1,767万8,500頭に増加し、増加率は50.74%となる。阿壩州では1985年の735万3,800頭が2005年には1,200万9,000頭に増加し、増加率は63.3%となる。一方で、草原の持続可能な許容頭数は「理論載畜量」とよばれ、超過頭数の比率は「超載率」とされるが、2005年の段階で甘孜州が39.82%、阿壩州が74.69%となっている。<sup>68)</sup> 過剰な飼育は草原の退化を生み、四川省全体では約75%にその現象が確認され、家畜が食べる新鮮な草は20年間に9.33%減少している。

草原の退化を加速している要因に鼠や虫の害があり、黄河源流の星宿海などでも拡大している現象である。甘孜・阿壩両州と涼山州での2005年の草原鼠害面積は、利用可能な草原面積の20.29%を占め、前年より2.09%拡大している。<sup>69)</sup> この地域でも水土流失や急傾斜地の開墾などが見られ、貧困化を加速している。2002年に四川省の少数民族地区では20県が全国扶貧開発重点県となり、全国の扶貧開発重点県の56%を占めた。<sup>70)</sup> 甘孜州で見ると食料自給など基本的な生活水準に達していない人口は、21世紀初頭で46万5千人となり、同州の農牧民人口の63%を占めており、2004年末の農牧民の純収入は全省平均水準の45%にとどまっていた。阿壩州の1,356カ所の行政村のうち2003年に1人平均の純収入が1,000元以下の村が1,048カ所あり、人口比で56.6%を占めている。<sup>71)</sup>

西部の生態環境が脆弱な県の76%が貧困県であり、貧困問題の解決には少なからぬ克服すべき課題がある。一つは国家の救済措置に頼ろうとする姿勢である。二つ目は商品経済に対する認識の欠如である。例えば甘孜州では牛・羊を財産と考え、売り惜しみをして老死させている。また過剰な開墾や草原利用は自然災害を生み、貧困戸に転落するケースを多数生んでいる。自然災害による貧困戸への転落の比率は、甘孜州で農牧民人口の40%以上、阿壩州で19.57%と算出されている。<sup>72)</sup> こうした問題を解決する手段として期待されたのが、これまで考察してきた生態移民政策であった。

甘孜州では移民の遷移によって17.11万畝の荒地が開墾されて優良な農田に変わり、20万畝以上の25度を超える傾斜耕地の退耕還林（還草）に有利なだけでなく、年間1.1億斤の食糧を生産して、貧困農牧民の基本的な自家食糧問題を解決し、毎年2,900万斤の商品作物を提供し、22万畝の経済林木基地の建設を通して優質な果物とドライフルーツを作って、毎年21,700万元の総収入を実現し、各



戸の最低収入5,000元、1人当たりの収入1,100元を実現するという目標を掲げている。<sup>73)</sup>しかし、同様の状況下にある紅原県瓦切郷の移民村の報告を見ても、移民政策が上記のような成果を生んでいるとは考えられず、<sup>74)</sup>横断山区の移民村の実情に照らしても目標達成の困難さが窺えるのである。

南水北調中線工程の起点となる丹江口ダムの堰堤のかさ上げは、北京を中心とした華北の水不足を解消する切り札となる工事であり、ダムの172kmの水位より下の地域に住む16万5千人の集団移住を实行する大規模な移民政策を伴っている。湖北省の三峡ダム建設に伴う移民の遷移には18年間を要したが、丹江口ダム改修に伴う移民計画は短期間に完成させると当局は言明している。<sup>75)</sup>移民は河南省内の淅川県以外の153ヵ所の移住先に14.6万人、淅川県内に1.9万人で、短期間に実現できたのは「移民の自主建房」にあるといわれている。政府は確かに1戸当たり8,000元の費用で家屋を建てて移民に出費させないが、すべて同一デザインで改造は許さないという方針であった。<sup>76)</sup>移住の際に携帯できる物品は、1人当たり体積にして0.5m<sup>3</sup>、重量は50kg以内で、大型バスを使って移動している。<sup>77)</sup>墓地の移転に関しては、烈士墓の移転費用は出しているが、<sup>78)</sup>おそらく民間には出していないであろう。「北京は数十万人の淅川移民の苦しい半世紀を考えていない」<sup>79)</sup>という声は、現実を反映したものといえよう。

ダム建設が生み出す移民のうち貧困人口にあたる者は、全国で500万人に近く、その比率は全国農村人口貧困率の1.5倍に当たるとされ、<sup>80)</sup>この貧困問題の解決は大きな課題となっている。丹江口ダム改修に伴う移民の特色については、ダム移民の絶対多数は農民で、長期にわたり相対的に閉ざされた辺僻の農村や山地で生活し、文化水準・思想観念・生活スタイルが比較的遅れていると見なされている。さらに移住後には、新たな生活環境・生産方式・人間関係・風俗習慣・宗教信仰に対して、多くの移民がすみやかに適応するのが難しく、故郷に帰ろうとする現象が生じている、<sup>81)</sup>と分析されている。自然改造がもたらすこうした移民も、広義の生態移民とみなしてよいかもしれない。

## おわりに

黄河と長江という中国を代表する大河の上流域のチベット族・彝族・傣族など少数民族の生態移民の現状と課題を追求すると、ほぼ共通する問題点が浮かんでくる。劣悪な気象条件、傾斜地開墾が加速する水土流失、過剰な放牧が生み出す草地の退化、開発に伴う生物多様性の喪失などは、大河の上流域の生態環境を破壊し、水資源確保にとって脅威となっている。大河上流域の牧畜や農耕を停止して、森林や草原の回復を図ることは、水資源を回復し、持続可能な状態に維持する基本方針と考えられる。その基本方針の下に高地の住民を移動させる生態移民政策の方向性は正しいと思われる。

生態移民政策によって移住した人々は、新たな住宅に住み、衛生条件も改善され、病院にも通うことができ、文明生活を享受することができるようになった。移民にとって子女の教育問題を解決できるようになったことは歓迎すべきことである。その一方で、商品経済の社会になじんでいない少数民族を移住させるとき、さまざまな問題が生まれてきている。補助金があるとはいえ、移民に住宅建設資金の不足分を借金などで捻出させ、移住地では狭小な土地しか提供できない。移民はその土地を活用するために種子・農薬・化学肥料・マルチフィルムなど農業用資材の購入を迫られ、生活のために

多様な食料品や油の購入費・燃料費・医療費などを支出し、こどもの学費や制服代などの購入費用も大きな負担となっている。

増大する支出をまかなうには収入の増加が不可欠であるが、一部の地域の移民を除いて、この収入増加の道が見出せないことが大きな課題となっている。これまで高地で放牧していた家畜は販売して一定の現金収入を得られたが、移住先では多くの家畜を飼育できず、少数の家畜も飼育環境の影響で病気に罹りやすい。言語の面でも漢語の習得に苦勞し、漢語ができなければ就職もできない。漢族の服装に変える必要も生まれている。

本稿で取り上げた移民村は、ほとんどが水不足に苦しめられ、とくに生産用水の欠乏は用水購入費という支出を増やし、生産性向上の壁となっている。欠水に悩む黄河上流域だけでなく、長江上流域の移民村でも水不足が問題となっている。南水北調の西線工程は、長江上流域の水を黄河源流域に送水する計画である。その長江上流域も水不足に悩んでいるのである。丹江口ダムの堰堤を高めるのは、南水北調中線工程の北京などへの送水を実現するためである。その実現は、一方で南流する漢水流域の水不足を加速している。不本意な移住で回帰願望をもつ移民を生んでいる丹江口ダムの改修は、結局のところどのような意義をもつのだろうか。

生態移民に対しては、移民への補助金のあり方、移民子女への奨学金の供与、移民に対する啓蒙活動の工夫、環境保護部門の整理、<sup>82)</sup> 扶貧計画の見直し等々可能な部分から着手して、効率的で長期的視野に立った、移民自身の思いを反映した持続可能できめ細やかな政策を実行することが望まれるのである。

#### 【註】

- 1) 拙著『中国の環境政策<南水北調>』（昭和堂、2014年）。
- 2) 拙稿「青蔵高原の水資源と環境」『神戸女子大学文学部紀要』第47巻、2014年。
- 3) 馮雪紅『三江源蔵族生態移民三村』（社会科学文献出版社、2016年、以下『蔵族生態移民』と略す）。この著者を中心とする研究グループの現地調査は、2014年7月22日～8月2日、2014年8月17日～9月1日、2015年7月19日～8月29日 の3期に分けておこなわれた。なお三江源区は少数民族の居住地域であるが、チベット族が88%を占め、牧畜業が主要産業であり、貧困人口が70%を占める（<三江源区生態補償長効機制研究> 課題組著『三江源区生態補償長効機制研究』科学出版社、2016年、60頁）。
- 4) 『蔵族生態移民』17頁。
- 5) 同前書、28頁。
- 6) 前註4）。
- 7) 『蔵族生態移民』29～30頁。「青海三江源自然保護区生態保護と建設全体計画」によれば、2004～2010年に三江源の核心区の全牧民を移住させ、「無人区」に変えてしまう計画であった（秦大河主編『三江源区生態保護与可持續發展』科学出版社、2014年、118頁）。
- 8) 『蔵族生態移民』32頁。
- 9) 同前書、33頁。
- 10) 同前書、33～34頁。
- 11) 同前書、36頁。
- 12) 同前書、38頁。三江源をもつ青海省は、文化教育が最も遅れた地域であり、牧民の教育を受けた期間は平均して3年足らずで、成人の非識字率は45%に達する（秦大河前掲書、121頁）。また扎陵湖郷より移住した移

民 53 戸に対する技能研修をおこなったところ、受講者は合計で自動車修理 23 人（次）、自動車運転 5 人（次）、紡紗技術 19 人（次）、消防知識訓練 5 人（次）と積極性に欠けていた（秦大河前掲書、123 頁）。

- 13) 『藏族生態移民』 56 ～ 57 頁。
- 14) 同前書、61 頁。
- 15) 同前書、64 頁。
- 16) 同前書、76 頁。
- 17) 同前書、78 ～ 80 頁。なお聞き取り対象者に男子が多く、女子が少ないのは、この研究グループの聞き取り状況をそのまま反映している。
- 18) 同前書、82 ～ 83 頁。これは 60 歳女子と 73 歳男子の回答である。
- 19) 同前書、89 頁。
- 20) 前註 2)。
- 21) 『藏族生態移民』 96 頁。
- 22) 同前書、107 ～ 109 頁。
- 23) 同前書、113 頁。
- 24) 同前書、118 頁。
- 25) 同前書、134 頁。
- 26) 同前書、137 頁。
- 27) 同前書、139 頁。
- 28) 同前書、154 頁。
- 29) 同前書、157 頁。
- 30) 同前書、186 頁。
- 31) 同前書、196 頁。
- 32) 同前書、228 頁。
- 33) 同前書、254 頁。
- 34) 李星星・馮敏・李錦等著『長江上游四川横断山区生態移民研究』（民族出版社、2007 年、以下『横断山区生態移民』と略す）45 ～ 46 頁。扶貧問題に関しては、資金不足が課題で地方政府の財政困難が要因となっている。また扶貧資金の調達制度の不備も要因となっている。その管理部門が多いことや扶貧項目の重複建設、資金の浪費はその効率化を妨げている。扶貧の数を求めるだけで、質を重んじないことも問題である（冉瑞平著『長江上游地区環境与経済協同発展研究』中国農業出版社、2006 年、200 ～ 201 頁）。
- 35) 『横断山区生態移民』 51 ～ 53 頁。なおこの記録は、同前書を著した研究グループが、2004 年 5 月に 15 日間の調査をしたデータによる。
- 36) 同前書、56 ～ 58 頁。
- 37) 同前書、62 頁。
- 38) 同前書、69 頁。
- 39) 同前書、70 頁。この宝清村の記録は、当該研究グループの 2004 年 8 月の 5 日間の調査による。
- 40) 同前書、72 ～ 74 頁。
- 41) 同前書、86 ～ 87 頁。
- 42) 馬正友（30 歳の林地管理人、家族 5 人）の家庭では、調査時の年間収入 10,500 元、支出 9,000 元となっている（同前書、90 ～ 92 頁）。
- 43) 同前書、89 頁。
- 44) 同前書、96 ～ 97 頁。この調査は、他地域と並行して調査カードを作成せず、座談会形式でおこなっている。
- 45) 同前書、101 頁。
- 46) 同前書、99 ～ 101 頁。
- 47) 同前書、102 頁。
- 48) 同前書、103 ～ 105 頁。同書に調査方法は明記されていないが、3 家庭に対する詳細な聞き取りの記録がある。

- 49) 同前書、107 頁。
- 50) 同前書、116 頁。
- 51) 同前書、118 頁。
- 52) 同前書、121 頁。
- 53) 同前書、124 ～ 127 頁。
- 54) 同前書、128 ～ 129 頁。
- 55) 同前書、130 頁。
- 56) 同前書、130 ～ 132 頁。僱傭族の女性が漢族と結婚するとき、族規に必ずしも順う必要はないが、相互理解が進んで、水稻栽培でも肥料・種子・農薬などは漢族が出し、僱傭族が働いて収穫物を折半するなど役割分担を決めている（同前書、133 ～ 134 頁）。
- 57) 同前書、135 ～ 137 頁。
- 58) 同前書、138 ～ 141 頁。
- 59) 同前書、147 頁。
- 60) 同前書、152 ～ 153 頁。
- 61) 同前書、153 ～ 154 頁。
- 62) 同前書、158 ～ 159 頁。
- 63) 同前書、161 ～ 163 頁。
- 64) 同前書、163 ～ 164 頁。この調査は、該研究グループが 2004 年 4 月 6 日に実施した。
- 65) 同前書、165 頁。
- 66) 同前書、166 ～ 167 頁。移民と漢族との間の反目はその後解消され、漢族は移民を無償で助ける状況も生まれてきたと調査は報告しているが、どのような経過で反目解消が実現したのかは語っていない。あるいは国家の政策だけに、期待される成果を生んだと結論づける必要があったのかもしれない。
- 67) 同前書、170 ～ 172 頁。初級中学に進級すれば年間 1,000 元以上が必要で、トウモロコシ、洋芋、ヒマワリの種をすべて売っても 1,000 元余りにしかならないと答えている。
- 68) 同前書、202 頁。
- 69) 同前書、203 頁。
- 70) 同前書、227 頁。
- 71) 同前書、236 ～ 237 頁。
- 72) 同前書、234 ～ 236 頁。
- 73) 同前書、254 頁。
- 74) 同前書、172 ～ 190 頁。
- 75) 中共南陽市委組織部南水北調精神基地編、石成宝著『南水北調移民書記日記選』（人民出版社、2016 年）107 頁。
- 76) 同前書、142 ～ 143 頁。
- 77) 同前書、86 頁。
- 78) 同前書、50 頁。
- 79) 同前書、115 頁。
- 80) 李振華著『水庫移民後期扶持・法律制度研究』（中国政法大学出版社、2014 年）3 頁。
- 81) 同前書、23 頁。丹江口ダムの工事完成後も故郷に帰りたいと思う多数の移民の存在が問題となっている（孫海浜著『水庫移民生計問題研究』中国社会科学出版社、2014 年、3 頁、53 頁）。
- 82) 冉瑞平前掲書、109 頁では、環境保護部門の機構が不健全で、多くの県では独立した環境保護局がなく、部門の編成も不十分、工作人員が少なくして任務が繁多、監督管理部門の設備の遅れに加えて経済部門より弱い立場にあると指摘している。

キーワード：中国の生態移民